

## 第一章 郊外の下宿

新聞広告を見て相談を持ちかけたのは夫のママフォードであった。妻は寝耳に水といった表情を浮かべて彼の方を見た。

「えっ？・・・そんな必要あつて？ 私たち、ぜいたくなんか・・・」

「いや、いや！ そんなじゃない。こういうのも、君を楽しくさせてくれる一案になるんじゃないかって、ふと思っただけだよ。君も、ちよつと寂しいなつて感じる事が、日に何度かあるはずだし、家のスペースも十分・・・」

エメリンは真剣に考えてみたが、若くても思慮深い女性だったので、自分の考えをすべて口に出すようなことはしなかった。たしかに今の家賃はきつかったし、クラレンスの通勤の定期券代も馬鹿にならない。しかし、二人はそうした点に目をつぶつてまでも、サットン<sup>(1)</sup>のきれいな空気の方を優先してきたのだ。ここはママフォードの妻子にとつて非常に良い場所で、実際にロンドンから引越してきてからというものの、妻も子も健康状態がすごく良くなつていた。さらに、ロンドンの友人たちから遠ざかったことで、節約するにも都合良かった。招待を断りやすくなつたし、招待のお返しをする必要もさほどなくなつたからである。また、家が遠くなつたことは、公共の娯楽——たびたび社交のためだけに強いられる出費——を控えるのに、ま



たとなひ口実になった。現在の家はとても広いし、庭も快適である。おそらくクラレンスは自分の妻が話し相手を持つことを心の底から願っていたのだろう。とはいえ、この新聞広告には同時に別の意味で彼の興味をそそるものがあつたのかもしれない。

若いレディー。立派な親類縁者がいて、リスベックタブルちゃんとした家庭での同居を希望。ロンドン郊外、チャリング・クロス<sup>(2)</sup>から十五マイル以内。申し分のない身元保証書を提示することが可能。重要なのは家賃ではなく、居心地の良さと楽しい交友関係。まかない付きの下宿は不可。——問合先はロンドン、イースト・セントラル、フェンチャーチ・ストリート、<sup>(3)</sup>ヒギンズ兄弟商会気付、ルイズ。

妻は何度も何度も新聞広告を読んだ。

「下宿人を置いてるなんて噂されちゃ、困るわよ、あなた」

「そんな心配はないよ。これは明らかに裕福な人だし、最近じゃ、よくある類の契約だぜ。いわゆる高級下宿人<sup>ハイインクゲスト</sup>ってやつさ。もちろん、下宿人の外見が君の好みじゃないようだったら、受け入れようなんて夢にも思わんがね」

「でもね」と、エメリンが不審そうに尋ねた。「私たちって資格があるかしら？ 『立派な親類縁者がいて』ってあるんだけど・・・」

「驚いたね！ 恥じることなんか全然ないだろう？」

「もちろん、そうよ、クラレンス。でも・・・『楽しい交友関係』ってのもあるし、それにっいてはどうっ？」

「君と一緒にいると、とっても楽しいよ」と、マムフォードは気品を感じさせるように答えた。「それにフエンティマン夫妻もおられるし・・・」

これは二人がサットンで親しくしている唯一の家族である。立派な人たちで、少し生真面目すぎて、群を抜いて羽振りがいいわけでもないが、人前<sup>プレゼンタブル</sup>に出せる夫婦ではあった。

「心配なのは・・・」とエメリンはつぶやき、そこで急に言葉を切った。「あなたが言うように」と、彼女はほどなく話を続けた。「これはとても暮らし向きのいい人よ。『重要なのは家賃ではない』っていうし・・・」

「じゃ、いいかい、君・・・短い手紙なら出して悪いことはあるまい。はつきりした言質げんちを与えないような、そんな手紙さ。ぼくが書こうかね、それとも君が？」

手紙の文面は一緒に考え、エメリンが下書きを清書した。彼女はとでも字がうまく、句読点ならお手の物だった。お上品な人の目を意識して注意深く考え抜かれた手紙で、書き手の身分については最低必要限の細部しか書いておらず、家賃については後日相談ということになった。「みんなに説明するのは簡単だよ」と、マムフォードは手紙の投函から戻ると満足そうに言った。「君に話し相手が必要だつてことは、ね。たしかに必要だよ。しばらく一緒に滞在してくれる女の友だち・・・そういうふうにするべきかな」

一週間たったが、返事は来なかった。マムフォードは気にしていないふりをしていたが、エメリンにはその態度に新たな不安が読み取れた。

「包み隠さずに話してちょうだい、あなた」と、彼女はある晩せつつくように言った。「私たちの生活つて、そんなに・・・」

彼は腹藏なく答えた。「冗談ではすまないほど、そんなに不安になる必要はまったくない。借金なんかしないで暮らせる収入が十分あるし、今後も常にそう思えるだけの理由がある。だけど、いつも年度末がかなり黒字であれば、それはそれで一安心ということになる。もう三五歳で——ちゃんと出世もしている。男たるもの、単なる生活の保障だけでなく、将来の備えもしなければならぬ——とか何とか、マムフォードは答えた。

「他の広告にあたってみましょうか？」

「ああ、ダメだよ。ぼくの目を特に引いたのは、これだけなんだから」

翌朝になって「ルイズ・E・デリック」と署名された一通の手紙が届いた。手紙の主によると、広告に返事をくれた二百通ほどを読み比べ、よく考えるのに手間取ってしまったようである。「ホントに愚かでしたわ。全部を記憶することなんかできないんですもの。でも、あなたの返事は読んですぐ気に入りました。それで、イの一番に返事を書いてる次第です。面談に行かせていただけますか？ お手紙よりずっとうまく自分のことを話すことができると思います。明日はどうでしょうか、午後などは？ よろしいかどうか、電報<sup>(4)</sup>を打ってください。タルス・ヒル、<sup>(5)</sup>エミリア・ロード、コーバーク・ロッジ<sup>(6)</sup>宛てに」

この手紙について考えていたマムフォードはいつもの汽車に乗り遅れてしまった。厳密に言えば、手紙は彼が期待していた類のものではなかったし、エメリンも同じ疑念を抱いていた。筆跡はまずまずに思えたし、綴りの間違いもなかった。しかし——洗練されたところは？ この若い女性の手紙の書き方もまた非常に無頓着なものだった。それから、家庭の状況についてはまったく何も記されていない。タルス・ヒルのコーバーク・ロッジ、問題なく上品な場所だが——

「会ってみても悪くはないわね」と、エメリンがようやく切り出した。「電報を打ってよ、クラレンス。実のところ、おあつらえ向きの娘さんかもしれないわ。すぐく上品な方を想定して

たんで、むしろホツとしてるのよ。結局、ねえ、あなたは……その、ビジネスに携わって……」  
「たしかに。それに、この人もビジネスに関係した家柄みたいだ。ただ、もう少しレディーらしい書き方だったらいんだけど……」

エメリンは自宅を整理整頓し、客間を花でいっぱいにしてから、貸す予定の部屋をできるだけ魅力的にし、昼食のあとは長い時間をかけて自分の容姿もしっかりと整えた。彼女はスラっとした美しい三十前の女性で、顔の色つやはいいが少し青白く、髪はやや赤褐色ぎみで、正直そうな目をしていた。流行の小物類も、彼女のちよっとした虚栄心も、その根本に卑しい性格が見られるわけではなかった。他人の規律ただしい家庭生活を嫉妬することなく賞賛し、自分でも大事にしていた。収入を増やしたいという夫の願望にはかなり動揺させられたが、今日の面談が重要であることは十二分に理解していたので、そわそわしながらも精魂を傾けて成功裏に終わらせる決意であつた——ただし、デリック嬢と一緒に暮らして行けそうな人だと分かればの話であるが。

四時頃に訪問者の呼び鈴が鳴り響いた。寝室の窓からエメリンはデリック嬢が近づいてくるのを見ていた。駅からの距離は歩いて五分たらずだったので、訪問者は当然ながら徒歩でやって来た。日焼けしていたが、かなり目鼻立ちの整った、ずいぶん衣装が凝ったお嬢さまである。ふるまいは手紙の書き方と一致していて、自由気ままな歩き方、顔をぐいっと上に向け、両肩をいからせたものだった。「ああ、悪趣味な方ではないと思うんだけど」とエメリンはつぶや

いた。「あんな歩き方、イヤだわ・・・ホントに。それに、あの取っ手の馬鹿でかい日傘ときたらー！」

「マムフォード夫人は御在宅かしら？」という澄んだ素直な声が階段の上にあったエメリンに聞こえた。よし、*h*音(7)がちやんと聞き取れた・・・神様、感謝いたします！

客間に入るとすぐ、彼女はデリック嬢が自分と同じように緊張している様子だったので驚いた。お嬢さまの顔は紅潮していて、「はじめまして」と言う時に息がつまりそうだった。

「この家を見つけてるのは造作なかったでしょうね。汽車のこと、書いてくださいれば、駅までお迎えに行きましたのに。あつ、でも・・・私ったら、なんてお馬鹿さんなんでしょ!・・・あなたのこと、分からなかったでしょうにね」

デリック嬢は笑って、突然リラックスした感じになった。

「まあ、そんなことおっしゃるなんて」と、彼女は声をあげて陽気になった。「まさに同じこと、あたしも時たま言うんですよ。それに、めっちゃ嬉しいですわ、あなたが・・・怒らないでくださいね・・・つまり、あなたが怖い人じゃなくなつて」

二人は一緒になつて笑った。エメリンは、お嬢さまが受入れ可能なレディーかもしれないと分かると、喜びを抑えることができなかった。衣装に欠点がいくつもあるのは否定できない。お金の使い方を誤った部分もある。とはいえ、目にさわるような、悪趣味など、ぎっさなどはない。そして、話し方については、厳密には洗練されていると言えないが、卑しい生まれを示す

ような欠点もない。それから、口もとに何か魅力的とは言えないようなものが見られはしたが、それでも気だてのよい女性に見えた。

「サットンとは全然ご存知ないのでは？」

「以前こちらに来たことはありません。でも、雰囲気は気に入りましたよ。この家についてもそうです。このあたりには、お知り合いがたくさんおられるんでしょうね、マムフォード夫人？」

「えーっと……いえ、懇意にしているのは一家族だけです。お友だちはロンドンに住んでおりますのよ。もちろん、こちらにはよく出てきてくださいます。ご存知かどうか分かりませんが、ウエスト・ケンジントン<sup>(8)</sup>のカービー・シン普森夫妻とか、ハイゲート<sup>(9)</sup>のホリングズ夫人とか……」

デリック嬢は目を伏せて考え込んでいるように見えたが、急に話し始めた。

「あたしには、お話しできるような知り合いがいませんの。申し上げておく必要があるんですが、こつちには母と一緒に来てるんです。駅で待つてくれています。あたしが戻れば、こつちまで会いに来てくれるでしょう。驚かれましたか？　ところで、お伝えしておかないといけないんですが、あたしは家族の者たちとうまくやってけませんので、家を出たいと思っております。母とはケンカばかりしてまして、近ごろは最悪なんです。説明しておきますと、母は再婚してまして、ヒギンズ氏には……あたしの名前でなくて嬉しいんですけど……最初の結婚で



できた自分の娘がいます。あたしたちは・・・あたしとヒギンズ嬢ですが・・・お互いに相手  
が我慢できないんです。いつか、こちらの家に住めるようになったら、もつとお話してできると  
思いますわ。ヒギンズ氏はめっちゃ金持ちで、あたしに対して不親切ということは一切ありま  
せん。ほしいものは何でもくれるんですが、あたしを家から追い出すことができれば、間違  
なく喜ぶことでしょうね。さらに不幸なことに、あたしには自分自身のお金が全然ないんです  
ところで、あたしと母が一番いいと思つたのは、あたしが最初にひとりりでうかがうことでした。  
それは・・・ちよつと、その・・・お互いに気が合いそうかどうか、確かめてみるためなん  
ですよ。そのあとで母が来て、あたしについて言いたいことをすべて言うことになつてんです。  
どうせろくなことは言わないつて分かつてますがね。あたしは相当ヤバイ性格だつて言われ  
るんですよ、みんなから。そんなふうに自分じゃ思つてませんし、あなたのような方であれば、  
ケンカすることもないはずですよ。だつて、めっちゃ素敵な方に見えますもの。でもね、実家じ  
ゃうまくやつてけません。だから、あたしたち、別々に暮らした方がいいんです。あたし、今  
ちよつと二二歳で・・・もつと年上に見えますかしら？ 働くための知識を何か身につけたわ  
けじゃありませんし、そんな必要もないと思つてます」

「お付き合いをたくさんしてみたいんですか？」と、マムフォード夫人は質問したが、彼女  
はいろんなことを考えていた。「それとも、数名の本当に立派な人たちの方がいいんですし  
ょうか？ あなたがどんな方たちとの交際を望んでおられるのか、まだよく分からないんです。有

閑階級の人たちか、それとも・・・」

その選択肢をエメリンはあいまいにしておいた。お嬢さまはしばらくの間また考え込んでいたが、いきなり意思表示してきた。

「あなたのお友だちは、あたしがまさに知り合いになりたい方たちで、それは間違いありません。とにかく、試してみたいと思ってます。重要なのは今すぐ実家を出て、どういう状況になるか、それを確かめてみる事なんです」

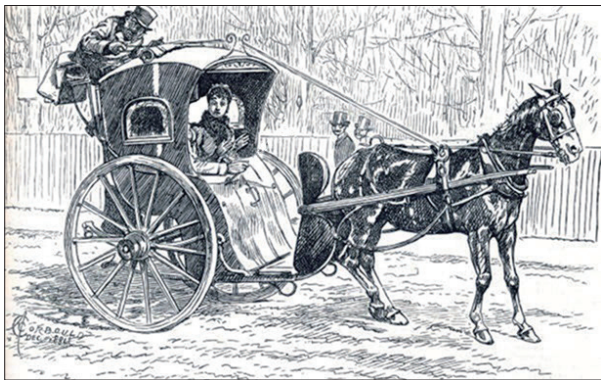
二人はお互いに笑った。エメリンはもう少し話をしてから家を見てまわることを提案したが、デリック嬢は見るものすべてを声高に賞賛してくれた。

「あなたの良いところは」と、二階の寝室の窓から下の庭を眺めていたとき、お嬢さまが急に声をあげた。「気取ったところが・・・何を言いたいか、お分かりでしょ。あたしにとつては、みんな下品で無知か、あるいは高飛車で、横柄で、とても一緒にうまくやって行けないか、そのどつちかに見えます。あなたはまさに、あたしが見つけたかった人です。それじゃあ、今から母を呼んできますから、会ってもらいますね」

このま<sup>ず</sup>いやり方にエメリンは異を唱えた。お二人、ご一緒にいらして、午後のティーでもいかがですか？ よろしければ、お母さまが話したいことをおっしゃってる間は、庭に出ておられるといいですよ。これに同意したデリック嬢は、ルンルン気分でサットン駅へと向かった。エメリンが十五分も待たないうちに、辻馬車<sup>ハンサム</sup> (10) が停まって、ヒギンズ夫人が家の正面をじつ

くり検分してから、娘に続いて細道を上がってきた。でっぶりした年輩の婦人を見た瞬間に、マムフォード夫人は状況がすべて把握できた。ルイズ・デリックは文明化への途上に——より良いものを意識的に求めて奮闘しているような段階に——いたのである。ヒギンズ夫人は、羽振りはいいが、ひとりよがりの悪趣味を絵に描いたような人物だった。顔色については娘よりもずっと化粧で白かったが、きめが粗いながらもまだ端正な——昔は酪農場で働いていた若い美少女だったのではないかと思えるような——顔立ちを保持していた。その顔立ちには情け深い性質と同時に怒りっぽい傾向が見て取れた。彼女は途方もない着飾りようで、重量感のある高価な装身具も加わって、息切れと汗に苦しみながらやって来たが、この家の女主人に注意を払う前に、じっと目を近づけて部屋を点検していた。

「マムフォード夫人」と娘の方が言った。「これが



あたしの母です。ママ、こちらがママフォード夫人ですよ。それじゃ、お願いだから、二人で話をしてる間は、どこか別の場所に行かせてちょうだい」

「ああ、それがいいわ、そうしておくれ」と、ヒギンズ夫人が声を大にして言った。「まあ、なんであづいんでしょ！ 庭にでも出てなさい、ルイズ。小さくても立派なおだくですわね、ママフォード夫人。あなたにルイズもぞつこみみたいですよ。簡単に人になつくような子じゃないんですが。もちろん、満足のいくような身元保証書はいただけますわよね？ 何事もビジネスライクにやりたいって、いつもそう思ってますのよ。たんな様は、シティー<sup>(1)</sup>にお勤めと聞いてますが、それなら宅のイギンズの友だちを何人か知っておられることでしょうか。ええ、ええ、よろしければ、一杯いただきます。駅で一杯いただいたばかりですが、やけに喉がかわく天気ですからね、今日は。それで、ルイズのことですが、どう思われますか？ うまくやって行けないって思われるようなら、正直に言ってくださいいな」

「いえいえ、実際、うまくやって行けそうですわ、ヒギンズ夫人」

「それについちゃ、恐悦至極に存じます。みんながみんな、ルイズとうまくやって行けるわけじゃありませんもの。たぶん、あの子の義理の父とわたくしのことは、しこたま話したんでしょうね。あの子に文句を言われる筋合いは一切ございませんのよ。だって、待遇についてや……」

「いえ、お二人ともそれはもう親切だって、そう言っておられましたよ」と、ママフォード

夫人が口を差しはさんだ。

「もちろん、そうするようにしてますわ。それに、イギンズ氏は気前がよくって、何でもポンポンと与えてしまうんですのよ。信じられんかもしれませんが、あの子にプレゼントする時は、五ポンド紙幣が六ペンス硬貨になっちゃうんですから。ねえ、ラムフォード夫人……いや、マムフォードでしたっけ？……わたくし、とっても若い時に結婚しまして……十八そこそこでした。その二年後の結婚記念日でしたか、デリック氏が急に亡くなりまして、そのあとイギンズ氏が現われたんです。もちろん、しかるべき期間は空けましたわよ。一つだけ言えるのは、でいしゆを二回も持ったことのある女で、わたくしほどじあわせだった者などいないってことです。わたくしには大きくなった息子が二人おりますのよ。めちゃくちゃ元気にやっつけてます。このルイーズの厄介な問題さえなけりゃ……」

ここでヒギンズ夫人は顔を拭くために言葉を切った。「たぶん、あの子はもう話したでしょうが、イギンズ氏は初めて会った時は男やもめでして、最初の結婚でできた娘が一人おりました。ルイーズよりも年上なんです。かわいそうに、その子の出産時に母親は亡くなりましたね。あなたには話しておいても構わんと思うんですが、その子は二六歳ぐらいで、美貌の点ではルイーズにとっても及びません。イギンズ氏は、親切そのものなんですけど、わたくしの娘と自分の娘との仲たがいについて、まあ、自分の娘の肩をもつても、そりゃ当然ですよ。実は、背後にはもつと事情があるんですけど、たぶん見当がつきますわよね。ですが、あなたの関心が

ないことで、わずらわせることはいたしません。まあ、そういうった状況でしようか」

急いで計算してみたところ、ヒギンズ夫人はせいぜい四十歳ぐらいと分かつて、エメリンは一驚を喫した。この婦人は少なくとも十歳は老けて見えるが、好き放題もはなはだしい生活を送ってきたに違いない。こういう望ましくない両親がいたということで、エメリンのルイーズに対する評価が影響を受けたことは言うまでもない。ルイーズの欠点の原因がどこにあるか、前よりはつきりと分かり始めた。確実なことが一つだけある。ルイーズが身内の者との決別を望んでいるという事実がなければ、彼女を受け入れることなど、とても考えられない。ヒギンズ夫人が予期せぬ時に突然サットンにやって来るなんて——とんでもない、考えただけでゾツとする。

「ヒギンズ夫人、お嬢さまはすべて私に任せるべきだ、そう思っておられるんでしょうか？」  
「まあ、ラムフォード夫人、そんなこと、わたくしが望んだりするもんですか。あの子は我が家を出るって自分勝手に決めちゃったんです。ですから、わたくしにできることと言えば、ちゃんとした人たちと娘が知り合いになれるように見届けることだけですわ。あなた方がそうした人たちであることは確信しておりますが、もちろん身元保証書はいただけますわよね？」  
その言葉を聞いてエメリンの顔は青白くなった。この問題を先に進めては困ったことになると思つた矢先に、ヒギンズ夫人がさらに尋ねてきた。

「それから、全部ひっくるめて、お家賃はいかほどになるでしょうか？」



このとき女中が紅茶のセットを持って客間に入ってきたので、エメリンはとても狼狽ろうたいし、住宅地としてのサットンの利点をいろいろと早口で述べ立てた。そして、ドアが再び閉まるまで、訪問客にはひと言も口出しさせなかった。それから、きつぱりした態度で、家賃が週に三ギニー<sup>(12)</sup>になることを伝えた。それは彼女とクラレンスが要求することに決めていた額より半ギニーほど高かった。ヒギンズ夫人は顔をしかめるだろうと思っていたが、そうした様子はまったくなく、至極妥当な額と想っているように見えた。そこで、お嬢さまは洗濯女から請求される代金ももちろん払うことになり、とエメリンは続けて言った。これに対してもヒギンズ夫人は即座に了承してくれた。

「一年で百六十ポンドか！」と、エメリン

はひとり心の中でつぶやいた。あーあ、残念！ もう少し要求しようと思えばできたであろう。身元保証書の問題は、二人の名前を出せば、切り抜けられるかもしれない。ブラックヒース<sup>(13)</sup>に住んでいる既婚の姉と、それからシティーの商社でまずまずの地位につき、ウエスト・ケンジントンの結構ちゃんとした地区に住まいがあるクラレンスの一番の親友ターリング氏がいるではないか。しかし、彼女は急に不安になり、夫が帰宅して鉢合わせになることを恐れた。

面談は三十分も長引いてしまった。エメリンは身元保証書を提示し、お返しに同じものをヒギンズ夫人に求めた。これには相手もびっくり仰天したようだった。まあ、わたくしのたんなりはフェンチャーチ・ストリートのイギンズ商会ですよ。あら、ただの形式です——私の主人を満足させるためですわ、とエメリンはあわてて付け加えた。ということで、ヒギンズ夫人は即座にシティーにある二つの商会の名前をあげた。これで当座の交渉は終了した。

客間に呼ばれたルイズは待つことになり疲れたような顔をしていた。

「置いていただけるのは、いつからでしょうか、マムフォード夫人？ あたし、すっかり決めましたわ、こちらに来ることに」

「二日か二日は待つていただけなくてはなりませんよ、ミス・デリック……」

「身元保証書の件よ、おまえ」と、ヒギンズ夫人がさえぎって言った。

「まあ、アホらしい！ 問題なんかじゃないの。誰だつて分かるわ」

「そらまた始まった！ アタシが話してゐるつていうのに、いつも突然さえぎってばっかり。



そんなふるまい、ママは許しませんよ。ママフォード夫人がどう思われるかしら。しっかりと警告をしておきましたからね、ママフォード夫人には・・・」

二人は数分間ほど口論していたので、エメリンは気が重くなってしまい、上品な決まり文句で仲裁に入ることをしなかった。とうとう二人が帰ってくれたので、追っ払うことができた彼女は、溜息まじりに感謝の言葉を発した。今日の午後に他の訪問客がなかったのは不幸中の幸いである。

「クラレンス、まったくもって問題外だったわ」と言いながら、エメリンは夫の帰りを迎えた。「お嬢さまの方はなんとか我慢できるけど、ああ、母親の方がね。あのおぞましさといたら・・・週三ギニーだって！ 考えただけで泣きたくなるわ」

翌朝の最初の郵便配達でルーズからの手紙が届いた。訴えかけるような、同情を禁じ得ないような書き方だった。「母に我慢できないのは分かっています、どうか、どうか、あたしを置いてください。サットンも、あなたの家も、めっちゃ気に入りました。あなたのことも大好きです。実家の者は誰も会いに来させないって、命にかけて約束します。だから、怖がらないでください。もちろん、置いてもらわなくても、そうしてくれる方が他にもいます。二百人の中から選ぶことができますけど、それよりは自宅に行きたいんです。どうか手紙を書いて、来てもいいって言ってください。あなたの前で母とケンカしてしまい、めっちゃ申し訳ないと思っています。ほしい物さえ手に入れば、あたしは腹を立てたりする人間じゃないんです」とか何

とか、同じような趣旨のことがたくさん書かれていた。

「ぜひとも置いてあげよう」とママフォードは言い放った。「いまいまいし連中が近寄らないんなら、いいんじゃないか？・・・ちゃんとh/音が聞こえたのは間違いないんだろ？」

「ええ、間違いないわ。かなり良い学校に通ってたんだと思うわ。それに、たぶん、ドレスや帽子も買い替えるように説得できるはずよ」

「もちろん君ならできるとさ。実際、お嬢さまを置いてやるのは、ほとんど義務のような・・・そんな気がしないかね？」

そういうふうな問題が解決したので、ママフォードは汽車に間に合うように楽しみに駆け出して行った。

デリック嬢がやって来たのは三日後のことで、半トンはあろうかと思える荷物を持ってきた。彼女は、はずむ足取りで戸口の階段を駆け上がり、玄関の広間で出迎えたママフォード夫人に熱烈なキスをした。

「お話したいことが山ほどあるの！ ヒギンズ氏は生活を始めるにあたって二十ポンドもくれました——つまり、あただけが使えるようになって。もちろん他にもいろいろ払ってくれるはずよ。めっちゃ嬉しいわ、ここに来て！ 辻馬車の料金、払ってくださいな。小銭がないんですの」

この数時間前にヒギンズ夫人から手紙が届いていた。とてもありえないほど書体も綴りも素

晴らしかった。

「親愛なるマムフォード夫人」と書かれていた。「Lは今日の午前中にうかがうでしょう。後悔なさらないことを願っています。言うつもりだったんですが、忘れてたことが一つだけありますので、今それを書いておきます。万一、お知り合いの殿方のどなたか、Lに好意を寄せてくださり、それが何かに発展するようなことがあれば、わたくしとH氏は二人とも感謝感激です。きつとH氏も娘に気前よくふるまってくれらることでしよう。さらに言えば、あなたとM氏に対する感謝の念についても、まったく物惜しみすることなく、心から喜んで示してくれることでしよう——あらあらかしこ、スーザン・H・ヒギンズ」

## 第二章 お嬢さまの恋人

マムフォード夫妻の家の呼び名である「ラニミード」<sup>(14)</sup>は、サットンの住民に自分たちは田園生活を送っているのだと確信させるような、そうした木陰におおわれた道路沿いの小さな区画の土地に建てられていた。これは正面が左右対称のレンガ造りの家<sup>(15)</sup>で、木材と化粧漆喰<sup>しゅくご</sup>の張り出し玄関がついている。玄関の片方が出窓で反対側が普通の平たい窓になっており、郊外の人たちの目には心地よいコントラストとして映っていた。小さな前庭には無塗装の木板で隙